

2022年12月11日 青戸教会 説教『新生』 高橋克樹牧師

ゼファニア3章14〜18節、ルカ福音書1章5〜11節

ゼファニア書は旧約聖書の中でも、全部で3章しかない非常に短い預言書です。「わたしは地の面から、すべてのものを一掃する、と主は言われる」(1章2節)という厳しい言葉が始まります。墮落した民の罪に対する裁きの宣言がなされています。エルサレムと、周辺の異邦人の国に対する神の裁きがつづられていきます。ゼファニアは宗教改革をしたヨシヤ王の時代に活動した預言者です。ヨシヤ王は政治的には良い治世を遂行した人物ですが、そうした治世にあっても、民は墮落していったのでした。良い政治が行われていても、民は神から離れていたのです。私たちが生きている現実においては、良いことをしたいと心の中では願っていても、実際にはできないことがままあります。「したいけれども、できない」「したくないのに、してしまう」ことは多いのです。それが人間の弱さであり、愚かさであり、存在の貧しさなのですが、このような人間の弱さはどのような時代にあっても起こりうることです。ゼファニア書は冒頭からずっと神の裁きの言葉がつづられていたのですが、3章9節から突然内容が変わり、滅びの中にある民に対して「わたしは、諸国の民に清い唇を与える」(9節)と神の憐れみが語られ、そのことによって主に仕える民となることができると高らかに宣言されるのです。つまり、神の赦しの決断によって、人間の弱さや貧しさが克服されるということです。ここで強調されていることは、人間の側の努力に左右されることなく、神が歴史に介入して、閉塞した時代を変革し、人間の弱さや貧しさを恵みへと変えていくということです。

ですから、14節から人格化されたエルサレムを意味する「娘シオン」に対して、『娘シオンよ、喜び叫べ』と慰めを語り始めるのです。神に信頼する人々が互いに喜びの声をあげるような事態が、これから神によってもたらされると励ますのです。『心の底から』(14節)の原文は「心のすべてにおいて」ですので、心全体で喜べと促している表現です。15節を見ると「主はお前に対する裁きを退け、お前の敵を追い払われた」と言っているように、裁きが下されるのではなく、逆に救いをもたらされることを喜びなさいと告げています。

さて、浜田廣介(ひろすけ)という童話作家の作品に「泣いた赤おに」という不思議な作品があります(ハルキ文庫)。人間たちと友だちになりたいという願いを抱く赤鬼は山の崖のところにある自分の家の前に立札を建てます。「心の優しい鬼の家(うち)です。どなたでもおいで下さい。美味しいお菓子がございます。お茶も沸かしてございます」と誰にでも読めるやさしい仮名の文字で書いたのですが、しかし、この赤鬼は自分のことを鬼と言っている以上、人間には彼が恐ろしい鬼にしか思えないのです。「心の優しい」と書いてはあっても、自分で言っているだけです。鬼であることを隠していないので、自分はやさしい鬼だと言っても人間がやってこないのは当然なのです。案の定、赤鬼の出した立札を見た人間たちは誰もいぶかしく思うばかりで近づこうとしません。人間は気味悪がり、鬼の家の中をこっそりのぞいたりするだけです。近づいたところをつかまえられて食べられてしまうかもしれないから、誰もが疑いの眼を向けています。家の中をのぞいた人間に赤鬼はやさしく声をかけるのですが、のぞいた木こりたちは鬼が追いかけてしまうかもしれないに逃げ出すのです。この赤鬼は自分の存在に絶望的になってしまいます。そこに、鬼が人間から嫌われていることをよ

く理解している青鬼が一つの申し出をするのです。自分が鬼として人間の家で暴れるから、人間の目の前で自分を思う存分やつつけて、自分が善い鬼だという証を立ててくれと言うのです。こうして、青鬼は山を下って行って、老人が平穩に暮らしている家に入って、食器やお櫃（ひつ）や味噌汁なべを手当たり次第にぶちまけたのです。そこに、人間と仲良くになりたい赤鬼がやって来て青鬼に殴りかかる。青鬼は退散する。芝居はうまくいき、赤鬼は人間の信頼を得ることができたのでした。

こうして赤鬼の家に人間たちが来るようになりました。赤鬼の家は質素な部屋に手作りの家具が置かれ、壁には赤鬼の自作の油絵がかかっています。その絵の中では赤鬼の首に人間の可愛い子どもがまたがっています。この姿は赤鬼が長いこと思い描いていた理想の光景で、それがやつと実現したのです。赤鬼は次から次とやってくる人間たちにサービスする生活を続けます。赤鬼は前とは違って寂しい思いをすることはなくなりました。けれども、目を重ねるうちに気がかりなことが生じてきました。親しい青鬼があの日以来一度も訪ねてこないのです。そこで、赤鬼は青鬼を訪ねることにしました。青鬼の家の戸口に立って開けようとしても、戸は固くしまっています。ふと気づくと、戸のきわに張り紙がありました。そこには「赤鬼君、人間たちとはどこまでも仲良く真面目に付き合って楽しく暮らしていただくさい。僕はしばらく君にはお目にかかりません。このまま君と付き合いを続けていけば、人間は君を疑うことがないとも限りません。……そう考えて僕はこれから旅にでることにしました。長い長い旅になるかもしれません。けれども、僕はいつでも君を忘れずまい。どこかでまた会う日があるかもしれません。さようなら。……どこまでも君の友だち。青鬼」。赤鬼は黙ってそれを読みました。二度も三度も読みました。そして戸に手をかけて顔を押し付け、しくしくと、涙を流して泣きました。

そういう内容です。さて、赤鬼は人間たちが訪ねてくるようになって、以前から思い描いていた理想の生活を手に入れました。ただ、訪ねてきた人間たちにお菓子とお茶を提供するだけの毎日です。果たして、赤鬼は幸福になったのでしょうか。この物語に登場する青鬼は自分を犠牲にして赤鬼の願いを実現させてあげようと思いました。しかも、自分が赤鬼と親しくしているところを人間に目撃されたら、赤鬼が人間から疑われる危険性があることに気づきます。だから、長い長い旅に出ることにしたのです。

私には自分を犠牲にして人間の救いのために長い長い孤独な死という旅に赴いたイエスの姿とダブるのです。確かに、人間は救われました。でも、救われた日常を過していくうちに、自分は幸福なのかという思いに急ぎ立てられてしまう人間の弱さを赤鬼に見てしまうのです。救われて初めてイエスの自分を思う心の深さ、広さに気づいて涙する私たち人間の姿がダブります。赤鬼は自分の願いがかなった日常生活を過す中で青鬼に助けられて手に入れた新しい生活が誰によってもたらされたかを考えるときがあって、初めて青鬼を訪ねます。ところが、青鬼は赤鬼のために配慮の旅に出ていたのです。私たちキリスト者も救われて手に入れた新生の生活がイエスのどのような強い愛の力によってもたらされたのかを心に刻みつけたと思うのです。神を信じる者を神が赦すという決断によって与えられた救いの日々を無にするような生活に陥らないために、イエスの十字架を心に刻みつけたいものです。